

シリーズ「語りえぬものを問う」

語りえぬものを問うⅡ

——米山リサ ワークショップ：暴力・戦争・リドレス——

S'interroger sur l'implicite Ⅱ—Lisa Yoneyama Workshop :

Violence, War, and Redress

2005年10月25日（火）

関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス 関西学院会館 風の間

〈講演〉

米山 リサ（カリフォルニア大学サンディエゴ校文学部準教授）

〈討論〉

荻野 昌弘（関西学院大学大学院社会学研究科教授）

佐々木 祐（京都大学大学院文学研究科博士後期課程）

松田 素二（京都大学大学院文学研究科教授）

〈司会〉

古川 彰（関西学院大学大学院社会学研究科教授）

ワークショップ「語りえぬものを問うⅡ—暴力・戦争・リドレス」報告

ジェンダー化されたトラウマと 日本のナショナリズム

今井 信雄*

キーワード：ジェンダー、ナショナリズム、トラウマ、リドレス、西洋のまなごし

2005年10月25日、関西学院大学 COE プログラムの一環としてワークショップ「語りえぬものを問うⅡ—暴力・戦争・リドレス」が開催された。米山氏は自身が経験した NHK 放送番組の改ざん問題や、「新しい歴史教科書をつくる会」の論者たち・議員・サポーター、それをとりまく言説、主体を立ち上げるしくみについて精神分析の手法を用いることで明らかにしようとした。

米山氏の論旨は明確である。米山氏によれば、日本には敗戦というトラウマが刻まれているという。それもジェンダー化されたトラウマである。いわば、敗戦というトラウマは家父長的文化的ナショナリズムとなって立ち現れてくるのであり、日本社会の状況はこの観点から説明されるのである。以下に、米山氏の主張を紹介していく。

暴力・戦争・リドレス

日本社会には、西洋のまなごしをうけたアジア男性観が存在している。国民や民族の敗北、屈従、失敗は社会全体のトラウマとして刻まれ、やがて規範的な男性性や民族の女性の排他的所有というかたちで主張されることになる。アジア人男性は、ハリウッド映画にみられるように「男として不十分」

*関西学院大学

な存在、「中性的」な、あるいは規範的な男らしさに達しない「男としての不十分」なアジア人男性というイメージによって描かれることが多い。いわばアジア人男性は「男として不十分な男」として表象されてきたのであり、日本社会はそのまなごしを相対化できないままである。そして、このようなイメージを内面化することで、より男性性を強調する方向に向かうのである。

しばしば「つくる会」の人たちは、ジェンダーフリーバッシングに走る。西洋のまなごしを内面化した彼らにとって、日本の男性は「不十分な男性」「中性化された存在」であり、それゆえに過剰に男性性を主張しなければならない。それは、自分たち自身のセクシュアリティを認めるのではなく、西洋のまなごしを内面化し、そのまなごしに従順になっているがゆえの行為である。また、「つくる会」の人たちにとって、男は簡単に謝罪するべきではなく、しばしば「謝る男」に対してもバッシングに走る。そして、男が簡単に謝るような姿勢に与することはできないように、諸外国から謝罪を求められたとしても、国家もまた簡単に謝罪するべきではない、ということになる。

また、このような同一主義的マスキュリニティ（男性性）が西洋のまなごしの反復とすれば、ある種のフェミニズムにおける一部の主張は、これらの同一主義的なマスキュリニティの裏返しでもある（「男はみんな一緒！」）。

このように考えると、〈敗戦による去勢〉というトラウマは、西洋・白人社会のまなごしにおけるアジア人男性のイメージの歴史から切り離して考えることはできない。それは、西洋に起源を持つ白人至上主義的なジェンダー妄想のグローバルな効果と、その摂取もしくは取り込みという事態であるだろう。

精神分析では、自分の過去を抑圧することでヒステリー症状が生じるという。そもそもヒステリー症状は女性の身体と結びつけられてきた。これは、女性が「模範的マイノリティ」であるからこそ抑圧されてきたという歴史を

示している。そして同じく、日本という国家も「模範的マイノリティ国家 model minority nation」である。であるからこそ、過去は抑圧されてしまい、その結果、「歴史への過剰介入」=思い出しすぎる事態がおき、それによってヒステリー症状が生じていると言える。

自らをとりまく支配的なイデオロギーや文化に準拠しようとする限り否認され、周縁化され続けるような、公的な歴史の語りとは相容れない自分の過去を「思い出し過ぎること」に苛まれ続けているのが、ヒステリー症である。「つくる会」の諸症状は、日本がアメリカの支配する冷戦秩序における「模範的マイノリティ国家」となった事実によってもたらされるヒステリアとして立ち現れている。この場合のヒステリアとは、「失語症」、「性的不能」の強迫観念とそれに対する攻撃的反動、ある種の「引きこもり」としての国際社会や近隣国家との関係からの完全撤退、国連否定、外交上の取り決めの否定、復古主義、近隣諸国との対話の拒否などを示している。

これらのヒステリー症状は一概に否定されるものではない。それはポスト冷戦時代として、「冷戦の時代にはみえなかったものが、今みえている」という意味での「歴史教科書」問題と捉えることはできる。いわば、このヒステリー症状は、支配的なイデオロギーや文化へと統合され、同化するさいに、否応なく抑圧されなければならない声でもあり、冷戦時に支配的であったアメリカの歴史の語りの挑戦ではあるだろう。しかしながらその挑戦は選択的なものでひとりよがりである。原爆の被害について主張したとしても、その4分の1が朝鮮から来た人であったことについては言わないのである。

ヒステリー症状とは、抑圧と暴力の存在を痕跡としてさし示す貴重な指標である。冷戦によって書き換えられ、封じ込められてきた歴史の語りは、東アジアにまだ数多く存在している。そしてその多くは、リドレス（つぐない・補償）を緊急に必要としている。大切なのは、「男性ヒステリア」の治癒じたいではなく、その症状が示唆するより広い構造的矛盾と言説的付置を見極め、それに対する根本的な変革を迫っていくことであるだろう。

米山氏の講演を受けて

以上のような米山氏の講演に対し、いくつかの問題提起がなされ、議論が展開していった。まず、荻野氏からはナショナリズムの相対性と普遍性について問いかけがなされた。荻野氏は、「西洋のアジア人男性に対するまなごしはたしかに存在するだろうが、日本が西洋のまなごしに全面的に影響されているとは限らないのではないか、今の状況は日本の普遍的なものをあらわしているとも考えられるのではないだろうか」と述べ、それに対し、米山氏は「日本のなかに普遍性はあるだろう」としながら、「それでもなおアメリカの影響をうけている」と、いまだなおアメリカのトラウマを引きずる日本の現状を指摘した。佐々木氏からは、「歴史教科書をめぐるヒステリアは、日本だけではなく、アメリカもヨーロッパも同じであり、ヒステリアの中にわれわれが閉じこめられているという感覚はある。では、そのようなヒステリアに対する具体的な実践の可能性はいかなるものであろうか」という、ナショナリズムに対処するわれわれの実践的要請について質問があった。それに対し、米山氏からは、「いかに実践するのかということこれから議論していきたい」と返答し、より広く開かれた議論の中にその可能性を見いだそうとする姿勢を表明した。

松田氏は、「たとえばアフリカにおいてもレジスタンスのなかで、女性の解放を唱えている人たちが女子割礼を推進する時期がみられる。あるいは、強制連行された人たちの話をきいてみると、それにたいするレジスタンスとして『男らしく〜』という話がでてくる。敗戦や支配という経験のあと、レジスタンスとして生まれてくるようなこれらの動きを米山氏はどのように位置づけるのか」と述べた。ジェンダー化されたナショナリズムを戦略の本質主義としてどのように評価するのか、というこの問いかけに対し、米山氏は「過渡的な戦略として家父長的な心理をたてなくてもよいし、家父長的ナショナリズムがあるさまざまな苦痛のことを考えると、あえて、こういったものを打ち立てないほうがいいのではないか」と返答した。

また、精神分析的手法のもつわかりやすさと、その限界について議論が展開する中で、米山氏は「ある記憶のなかで抑圧があり、部分的なあらわれがあるときに、よくみえていないものを次々とはがして行って、ある傾向を導き出すときに有効なのが精神分析的手法である」としてその有効性を述べた。

最後に、「謝罪する主体をどこに置くのか」という謝罪をめぐる責任の当事者性について、フロアを交えた意見交換がなされた。そのなかで米山氏は「謝罪ということが問題になるとき、それは謝る側の問題となってしまう、被害を与えた側の問題となってしまう。謝罪によって調停できるものではないし、謝った側が等価交換したと考えるものでもない。謝るのは謝る側の問題であり、本当は許すかどうかという問題が重要だ。その意味で、リドレスは等価交換ではないということだ」と、謝罪をめぐる主体性をリドレスという論点から捉え返した。

日本社会はいまなお敗戦のトラウマを引きずっており、そのトラウマはジェンダー化された家父長的ナショナリズムを引き起こすという、米山氏の指摘は非常に明確で説得力のあるものである。それは、ナショナリズムというレベルのみならず、われわれの身近な日常的なレベルにおいても「～らしく」という規範を生み出すしくみを明らかにしてくれる。本講演内容は、米山氏の近著〔米山, 2005〕で本格的に展開されているとのことなので、興味のある読者はそちらも参照されると良いだろう。

文献

米山リサ, 2005, 「戦争の語り直しとポスト冷戦のマスキュリティ」 倉沢愛子ほか編『岩波講座 アジア・太平洋戦争 第1巻 なぜ、いまアジア・太平洋戦争か』東京：岩波書店, 317-356.